

もしモンスターの堕天使
が銀さんみたいな感じ
だったら

ネルゲル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

pixivからこっちに持ってきました。

銀さんとルシファーが好きなんでやってしまった!! 少しずつ暇出来始めたので汗

超駄文でスローですが、よろしくお願いします。

タイトル変更しました。口調が銀さんに近いですが、姿はルシファーになっています。

目次

反逆の墮天使編

第1話く本当に世界に光をもたらす者 ですか？く	1
第2話く信頼と裏切りは紙一重く	15
第3話く己が定めた信念が為にく	26
第4話く信じたいなら最後まで信じろ	36
く妹達の動きく	50
第五話く軽い気持ちで他人の過去を見 るもんじやない①く	56

第六話く軽い気持ちで他人の過去を見 るもんじやない②く	71
第七話く協力者く	83
第八話く不器用な離別く	90

反逆の墮天使編

第1話く本当に世界に光をもたらす者ですか？く

―全ての始まりはここからだつた―

ある場所で魔物達が剣を取り争っている。

そこに後ろからコツ、コツと足音が聞こえてきた。

聞こえてきた方向へ一斉に見つめた。

そこには、紫色の六枚三対の翼を持った金髪の女性がいた。

その女性は、魔物達を無視をして気だるそうにその間を歩いていく。

目の前にある階段を昇り、頂上にある玉座へと辿り着くと直ぐに座り始め、魔物達を見下ろす。

それを見た彼女は面倒くさそうに告げた。

「我、墮天の王なり―」

そう告げた彼女、墮天使ルシファアの表情はやる気がないように見えた。

そんなやる気のない声とは反対に、新しき王の誕生に全員が歓声を上げた。

この世界は天界、煉獄、魔界と三つに分かれている。

場所は煉獄。

その上空に一機の飛行船の中から天使の羽が生えている者達、中央にはそれらを仕える者がいた。

「オーブよ。永遠に」

中央にいた女性、大天使長ウリエルは拳を胸に手を当ててそう告げると、部下達も復唱した。

そして、ウリエルを先頭に魔物達がいる地上へと羽を広げて飛行船から飛び降りる。すると

「てめーらあああああ!!遅れんなよおおおおお!!!」

叫びながら物凄い勢いで突き抜ける者がいた。

「ルシファアー!!隊立を乱すな!!」

ウリエルはもう一人の大天使長ルシファアーに注意したが、彼女はもう既に、地上に降り立っていた。

ルシファアーは愛用の木刀を現出して魔物達に躊躇なく突っ込んでいく。

「おおおおおおおおお!!!」

男らしい雄叫びを上げて容赦なく切り裂いていく。

そんなルシファーを見て、ウリエルは毎回思う事がある。

あれは本当に木刀なのか?というか今だに何故、ルシファーが木刀で戦うのかがわからない。

そんな事を考えながらも、ルシファーの遅れを取らないようにウリエルも負けず劣らずに切り込んでいく。

ウリエルの戦闘を眺めていたルシファーはフツと笑った。

「やるねえ。さすが大天使長だけあるねえ、ムニエル君?」

「私はウリエルだあ!!というか貴方も大天使長でしょう!!」

聞こえていたのか彼女は大声で訂正した。

「へいへい。そんな声出すなよ。カルシウム足りてないんじゃないの?」

やる気ない声で返してやると「貴方のせいよ!!」と返された。

「グオオオオオオ!!!」

目の前の大型のドラゴンが大きな口を開けて襲いかかってきたが、避ける事もせず口の中に右腕を突っ込んだ。

「何、腹減ったの? だったら存分に味わえよ」

突っ込んでいた右手から再び木刀を現出させてそのまま縦に斬り裂いた。

「まあ…味わえたらの話だけど」

悪い笑みを浮かべて消えた獲物がいた場所を見つめた。

「ルシファア様あ!! 流石です!!!」

「早く部隊を作って我々を入れて下さいよお」

ウリエルの部隊でもなく、ルシファアがいるからと勝手に付いてきた天使達がルシファアの強さに改めて褒めたたえ、部下になりたいと志願している。

「あ…気が向いたらな」

「絶対ですよ!」

「では、我々はオーブの回収を手伝って来ます!」

「さっさと行けよ。後から私も行くから」

適当に答え、それを聞いた天使達は一礼して飛び去った。

「…ハッ。部隊なんざ、もう…」

ルシファアは飛び去った方向を悲しそうな表情で暫く見つめていた。

(ルシファア…)

その後ろで切なそうに見ているウリエルがいた。

戦闘を終えて、オーブを発見したウリエル達はかなりの大きさに唾然としていた。

「……………」

「…ルシファー？どうかした？」

隣に来て、無言でオーブを見ていたルシファーを不思議そうに訪ねたが、彼女は首を振り

「何でもねえ…それよりも、式典に間に合うのか？」

逆に返されて、ウリエルはハツとした顔をした。

そして部下達にオーブの回収を任せ、飛行船に二人は乗り込んだ。

「さてと、システム解除はしっかり頼んだぜ？」

「…ルシファー？」

ウリエルはルシファーの表情を見て嫌な予感がした。

それは直ぐに実現した。

ルシファーはフルにして飛ばし始めたからだ。

「ルシファー！解除に間に合わない!!スピード落として!!」

「なら、強行突破だ」

「ルシファー!!？」

ゲートが閉じ切る前にその隙間から抜けていった。

雲を突き破った先には見慣れ光景、天界が姿を現した。

第一 セフィラ。

そこがルシファー達が住んでいる世界。

そんな神聖なある場所で式典が行われていた。

そこにはルシファーやウリエルと同じ大天使長であるミカエル、ラファエル、ガブリエルもいる。

「ルシさん達、また遅刻ですか?」

「またルシ君が何かやらかしたんじゃないか?」

「何だかんだ言っただの二人仲良いですよね」

三人が小声で好き勝手に言っている先には、

神の声を聞ける者、天聖の一人であるケテルが話を進めている。

そして

ガシャーン!!とガラスを突き破って来た者がいた。

三人が気にしていたルシファーとウリエルだった。

ウリエルは態勢を崩したが直ぐに立ち上がって拳を胸に当て

「ウリエル、ルシファー。ただいま二人ともただいま到着しました」っ!

ケテルに報告する途中でルシファーに遮られ、横目で睨みつけた。

式典を終え、罰として割ったガラスの修復作業を二人はしている。

「おー。二人ともやってるねー」

「二人とも、ド派手な登場でしたね」

ミカエルとガブリエルの声に振り向いたが、何も喋ることもせず二人は黙々と作業を続けている。

「無視ですかー?」

「そういえば無言の行で喋ってはダメでしたね」

ラファエルが罰の説明をすると、ガブリエルはルシファーの隣に来て

「ほら、ここに。ちゃんとなってますんよ?」

「オイっ…」

ガブリエルの揶揄いに思わず声を出すとバチッと監視カメラから電流が流れ、ルシファーの手に当たった。

いってーっと手を抑えてるルシファーを見てウリエルも「馬鹿…」と小声で喋るも、電流が流れてウリエルの手にも当たった。

作業を終えて部屋に行こうとしたウリエルを待っていたのは、ルシファー以外の三人だった。

「ふあゝつ……」

「無言の行、お疲れ様でした」

ウリエルは体を伸ばしていると、ラファエルが声をかける。

ウリエルは少し怒ったように

「お疲れ様じゃありません！わざわざ邪魔しに来るんだもの」

顔を少し膨らませて三人を睨む。ガブリエルはウリエルを見て笑いながら

「でも、ウリエルさんて戦闘の時と全然違いますよね」

言って揶揄う。

ウリエルは答えずに「ルシファーは？」と周りを見渡す。

「ルシ君なら先に帰るって言ってたよ。…またいつもの所なんじゃない?」

ミカエルがそう答えると四人とも顔を暗くした。

ルシファーは花を持って墓地の近くで座っていた。

かつては部隊を率いていたルシファーの部下達の墓地に。

「……あれから一年ね」

ルシファーは振り向かなくても誰が来たか、なんてのはわかっていた。

ウリエルだ。彼女もまた、墓に供える花を抱えて歩いてきた。

「私の部下じゃなかったら、コイツらも生きていたのにな」

「それは貴方の責任じゃない。原因は機密情報の漏えいによるものよ」

「だとしてもだ。部下の死は上司の…無能な私の責任だよ」

ずっと引きずっているルシファーにウリエルは喝を入れる。

「貴方は！ いずれ、私達を、天界を導いてくれる存在になる者よ。その事を自覚しなさい

！それに、貴方の部下になりたい者が沢山いるのよ！」

「物好きがいるもんだよな。全滅させた私にまた何かを失えつてか。酷な話だと思わねえか？ もう、あんな思いはごめんだよ…光をもたらす者？ そんな大層なもんじゃないんだよ私は。なんならお前がなれよ、ウリエル」

「ルシファー!! いい加減につ!!」

何を言っても聞く耳を持たないルシファーにウリエルは痺れを切らそうとしたが彼

女に木刀を向けられた。

「それに、今の天界はそんなに立派な場所か?ここにはもう、私の護るもんなどありやしねえよ」

ウリエルはルシファアの表情を見て声を出せなかった。

苦しみ、哀しみ、そして憎悪。

その三つが含まれていると彼女の表情からそう読み取れる。

ルシファアは木刀を消し、柔かに笑った。

「悪いな、ちよつと頭冷やしてくるわ」

そう言つてウリエルから姿を消した。

暫くウリエルはその場から動けなかった。

ルシファアは部屋に戻ると先客がいる事に溜息が出た。

「あ、ルシお姉ちゃん!!」

その人物は彼女が帰つてきたのがわかつた瞬間に抱きついてきた。

「お帰りなの。ルシ姉」

ルシファアはまた溜息をついて二人を見た。

「何がルシお姉ちゃんだ、何がお帰りだ。ここはお前らの帰る場所じゃないだろ。つー

かまた脱走したのかよ。サンちゃんにメタちゃんよお」

二人、ルシファー達とは違う場所で大天使長を務めている双子の天使、サンダルフォンとメタトロンだった。

「だって、ルシお姉ちゃんがいつまで待っても来てくれないから」

「我慢出来ずに来ちゃった。あつ、ハモつちやつた」

抱きついたままのサンダルフォンとそれを見ているメタトロンがハモつたのがおかしいのか笑っている。

やれやれとサンダルフォンの頭を優しく撫でるルシファーも二人には余程甘いのだろう。

すると、急にサンダルフォンを離し、真剣な表情をする。

「なあ…サンダルフォン、メタトロン」

「私が
になった時のお前らの仕事はわかつ

てるな？」

ルシファーの切り出しに二人は少し戸惑い出す。

「えっ？でもつまだ早いんじゃない？」

「いや多分、アイツは動いている」

「わかったなの。ルシ姉の思うままに」

アイツという言葉に二人も把握してコクンと頷いた。

ルシファーは物分かりの良い妹分に笑みをこぼし、二人を撫でた。

「その時はお前らの天聖も何か言ってくるだろうな。その時は私との関係は喋るなよ？」

それにもきちんとして頷き

「私達姉妹は何があつてもルシお姉ちゃんの味方だよ？」

「決してルシ姉を裏切ったりしないなの」

そう付け足すサンダルフォンとメタトロンの目には揺るぎないものがあり、強い決意を感じた。そんな二人をルシファーは

「ありがとうな」

と、頭を撫でてそう答えた。

「あつ、そうだ！ルシお姉ちゃんの大好きな甘いもの、たくさん持ってきたよ！」

サンダルフォンがバスケットに入っているフルーツを手渡すと怪訝そうに見た。

「ありがたいが……また、どっかからパクってきたんじゃねえだろうな？」

「い、いや違うよ？ちゃんと買ったんだよ〜!？」

ルシファーの痛い視線に冷や汗を出しながら焦る。

「…メタちゃん」

「…はあ。後で言っておくなの」

ルシファーは呆れ顔でメタトロンを呼び、彼女は言うことがわかっているのか、直ぐに頷いた。

「ほ、ホントなのによっ!!」

二人の対応にサンダルフォンはがっくりと項垂れた。

「こんな時間に呼び出しとは、何の用ですか？」

ウリエルはケテルに呼び出されていた。

ケテルの側近に聞いても答えはわからないとの事。

そうしているうちにケテルがいる場所に連れて来られた。

ウリエルは思い出す限りの事を伝え、謝罪しようとしたがケテルはその事ではないと首を振る。

「貴方に渡したいものがあるのです」

ケテルはウリエルにあるものを見せる。

「…これはっ…」

それを見て驚く。ケテルは衝撃の発言をする。

「天使殺しの剣」

「実は…ルシファーさんが反逆を企ててるとの情報があるのです」

それを聞いたウリエルはその情報が嘘である事を信じたい気持ちと

『今の天界はそんなに立派な場所か?ここにはもう、私の護るもんなどありやしねえよ』
ルシファーの言葉が心に突き刺さり、まさか本当にと、疑っている自分がいた。

第二話く信頼と裏切りは紙一重く

「…ルシファアールが反逆ですか？」

ウリエルはルシファアールが反逆を企てているとケテルからの報告に信じられない気持ちがあるが、ルシファアールが見せたあの表情が頭から離れない、

「何も根拠がなくて言っているわけではありませんよ」

彼女の心境を見抜くようにケテルは更に信じたくない言葉を発した。

「懐にオーブを隠しているとの情報が入っています」

「!? そんな…ルシファアールがっ!? 何かの間違いではっ!!」

この世界で最も重要であるオーブを盗む事は重罪だと。ルシファアールもよく知っているはずだ。

これには流石のウリエルでも彼女がそんな事をする筈がないと信じている。

「忘れたわけではないでしょう…オーブを持ち出され、この天界が滅びかけた事を」

ケテルは険しい顔をして

嘗て、魔界からの者達から攻め込まれて応戦していた所に、一体の体の中にオーブが埋め込まれており、天使諸共、消滅しかけた時の事を。

ウリエルも、他の大天使長達も知っている。

「…ならば、呼び出された理由は私に、ルシファーをケテル様の所に連れて来い。」と「親友である、貴方ならば」

ケテルはコクリと頷く。

側近が《天使殺しの剣》をウリエルに渡そうと近づく。

「分かりました。ですが！それはルシファーの無実を晴らす為にです。それはいりません！」

親友であるルシファーを刃を向けるなど、彼女には到底出来ない。

受け取らない彼女に側近はこう言う。

「万が一、の為なので…我々もコレを使わなくても済むのならば、深く…心から願っています」

万が一と言う言葉にウリエルは更に顔をしかめたが

「それに、ルシファーさんの実力もそうですが…あの木刀は我々にとつても脅威なので」

ケテルがルシファーが持っている木刀を警戒しているのだ。

ウリエルにとってあの、何でも斬れる摩訶不思議な木刀について彼が何か知っている
と確信した。

「…あれは一体、何なんです？ 本当に只の木刀なんですか？」

ケテルは一息ついてから話し始める。

「実は、ルシファアーさんには《光をもたらす者》の他に呼ばれてる名があります。それはルシファアーさんが隊長を務めていた頃…部下が全滅をしたのを目の当たりにし、たった一人で敵の本地へ突撃して…

そこに居る者達全てを木刀で葬ったのです」

初めてケテルから聞かされた事実には戸惑いを隠せない。

「我々、天聖達が到着した時に見た者は、金髪の髪に返り血を浴びながら切り倒す姿はまるで夜叉（おに）のようだ」と。それに、止めに入った私にも狂ったように攻撃した時は本当に恐ろしかった。あの状態の、仲間を失って激情していた彼女は、天聖達でも手こずる程に厄介なのです」

また何が起こるかわからない。あの時のルシファアーさんを目覚めさせてはいけない。最後にそう付けて、ケテルは話を止めた。

ウリエルは言葉を失った。

彼女が知っているルシファアーは面倒くさがりで、不真面目で、甘いものには目がない。

それに、やる時はやり、誰よりも優しく、誰よりも仲間を想って大切にしている彼女の姿でしか、見た時がない。そんな暴走したルシファアーを想像できなかった。

「非公開で我々は彼女をこう呼んでいます」

《『金色の夜叉姫』と》

金色の夜叉姫。

初めて知ったルシファアの異名にウリエルはグツと拳に力を入れた。

「もし…もし、ルシファアが反逆を実行したら…どうなりますか？」

ウリエルは彼女が本当に天界を捨てて攻めてきたらどうなるか？

ルシファア自身どうなるのかを含めた想いで聞いた。

それもケテルにはわかっていたみたいだ。

「今度は我々でも手に負えなければ、天界は滅ぶでしょう。それを止める事が出来たとしても…ルシファアさんは反逆者として処分される事になる」

勝つても負けてもウリエルにとっては最悪な結果でしかない。

負ければ天界は神諸共に死ぬ。

勝てばルシファアが死ぬ。どちらにせよ、そんな結果は耐えられない。

意を決して側近から剣を取り、ケテルに宣言する。

「必ず、ルシファアの無実を晴らして見せます」

だからこそ、親友を信じたい。その想いが更に強く出たウリエルだった。

「我々が何故、あの木刀を恐れているのかを教えましょう」

だが、飛び出す前にケテルからルシファアの木刀の本当の力を知ってしまった。そして、ルシファアを捜しに飛び回る際に彼女行動がわかってしまう。

彼女が帰る前にオーブの保管方法などを聞いていたり、何やら調べ物をしているとの情報を耳にして、ますます不安を募らせる。

(ルシファア……)

嫌な汗を垂らしながら、ルシファアの部屋へと飛んでいく。

そんなウリエルを見ていた天使がいたとは知らずに。

「……ウリエルさん？」

ベランダでラファエル、ミカエルの二人と過ごしていたガブリエルはウリエルが険しい顔で急いで飛んでいるのを見つけた。

彼女が見る方向に二人も見えた。

またいつも通りの事だと思い

「またルシ君が何かしてやらかしたんだろ」

ミカエルが言う。

だが、ウリエルの初めてみる表情に不安を募らせ

「何も起こらないといいんですが…」

ガブリエルはそう呟いた。

「……で？お前らは、いつ帰んの？」

遅い時間になっているにもかかわらずに居座っている二人に、ルシファーは頭を掻きながら呆れていた。

「むく。ルシお姉ちゃんは私達がいるのは嫌なの？」

「…そうなの？ルシ姉」

ルシファーの態度に悲しそうに目に涙を滲ませながら見つめる二人の視線が突き刺さる。

「…別にそういうつもりで言ったわけじゃあ……わかった！わかったからっ！！気が済むまで居ていいからっ！！そんな目で私を見つめないで！！」

あまりにも寂しそうな目に耐えられなかったルシファーは折れた。

「やったー!! あつ、ハモっちゃった」

さつきまでの涙目が嘘のように消えて喜んでいるサンダルフォンとメタトロンに演技がよつ…とボソつと呟いて笑った。

「そういえば帰り遅かったみたいだけど?」

サンダルフォンがルシファーに尋ねる。

「まあ……準備だよ。準備」

ルシファーの準備という言葉に、成る程と頷いた。

すると、ベランダから

『ルシファー? いないの? 入るよ?』

ウリエルの声が聞こえた。

「……どんだけ人ん家に集まるのが好きなんだ?」

その声に険しい声で呟くルシファー。

「お前らはここにいろ。絶対に出てくるなよ」

「う、うん……なの」

「ホントに言わなくていいの?」

心配する二人に優しく笑う。

「いいんだよ。お前らがいればそれで」

二人を宥めて、ウリエルの元へ行くと白い箱を持って中身を確認しようとしていた。

「夜遅くに不法侵入して泥棒ですかあ？コノヤロー」

「っ!？」

ウリエルはルシファアの声にピクツとしながら反応する。

「何の用ですかあ？ケテルにでも何か言われたか？」

「ルシファア……あのね？」

凶星を突かれたのか、言いづらそうにしているウリエルに対してルシファアは溜め息を吐く。

「まさか、お前にまで疑われてるとはねえ……」

面倒そうに見つめてくる彼女にウリエルの中で不安が大きくなる。

「わかっているのなら……どうしていつも通りなの？この箱は一体、何が入っているの？」

「なら、開けてみるよ？お前らが思っているようなもんが入っているといいな？」

真面目に聞いているのにニヤニヤしながら答えるルシファア。

ウリエルは彼女の言う通りにし、白い箱を開けると

「……オルゴール？」

綺麗な音色で人形がクルクルと回っているオルゴールだった。

「あーあ。せっかくサプライズでお前に渡すつもりだったんだけど……台無しだな。こりゃ」

「やれやれ、とわざとらしくするルシファーにウリエルはまさか彼女からのプレゼントされるとは思わなかった。

「どうしたの?急に」

「アレだよ……アレ。いつつも、ウリエルには迷惑かけてるからな。ちよつとした詫びだよ……。まあそんなんで詫びになってるかはわからんがな」

彼女が少し訳なさそうにしてるのがおかしいのか、クスつと笑って首を振った。

「……うん。まさかルシファーはそんな事するなんて思わなかったから。ありがとう……大切にするね」

「本当に嬉しそうにする姿を見て、ルシファーは恥ずかしいせいか、こそばゆい気持ちになった。

「それでね……今から一緒にケテル様の所に行こう? 貴方が無実だと言うことを証明しましょう?」

「あーわかったよ。けど、明日でいいか? なんか疲れたのか怠くてさ」
断れそうにないな、と思いきや答えた。

最も、ここに二人を残して置くのもマズイのが一番だが、ウリエルはそんな事は知ら

ない。

自分以外の誰か居るなんて思ってもいないだろうから。

「約束だよ？じゃあ…コレは貰っていくね」

明日行く事を約束し、オルゴールを大切そうに持って帰ろうとするが

「待て。それも纏めて明日渡すから、置いて行ってくれない？」

ルシファーに止められ、オルゴールは置いていけと言った。

ウリエルは不思議に思った。

「ちよつとそれ、調子悪くてさ。明日までには完璧にした状態で渡したいんだよ」

「そうなの？…綺麗な音色だと思っけど…」

何もおかしくないオルゴールだと思っていると、ルシファーが少し雰囲気を変えて近づいてきた。

さっきまでの穏やかなものから一変、険しい表情でこっちにきている事に怖いと感じた。

「ル、ルシファー…？急に怖い顔して、変…だよ？」

「何も変じゃないだろ？とにかく渡せば済む話だ」

ギリギリと迫られ、ルシファーの手が近づいた時に手を滑らせたのかオルゴールを床に落としてしまった。

その反動で箱が開いて綺麗な音色が響く。

「ごめんね！ルシファー……っ!？」

ウリエルは慌てて拾おうとしたが、箱の中の隙間から見覚えのある光が輝いているのが見えた。

その中身はやはり、オーブそのものだった。

「バレちまったのは仕方ないか。痛い目に遭いたくないなら、大人しく返してもらおうか」

ウリエルが見たものは

両手に紫の紫電を纏い、戦闘態勢に入ったルシファーの姿が目映った。

第三話～己が定めた信念が為に～

ルシファーはオーブを手に持ったまま驚愕しているウリエルに徐々に近づく。

「どうして…?」

裏切られたような顔で見つめてくるウリエルに、ルシファーはククツと軽く笑った。

「どうして…?言ったろ?この天界には私の護るもんはないってな。お前らには分からないだろうな。私にとって、今の天界には憎しみしかない事に」

笑った後は怒りに変わり

「仲間を失って気付いたんだよ…この天界は腐り切ってるってなあつ!!!」

ウリエルに向かって物凄いスピードで襲い掛かる。

「くっ!!」

ウリエルは翼を展開して、すぐに外に出ようとするルシファーの紫電が窓にぶつか
り、爆発を起こした。

そのまま二人は夜の天界を飛び回り、戦闘に入ってしまった。

「今すぐオーブを渡せ!!さもないと…どうなっても知らないからなっ!!」

紫電を仕舞って木刀を展開する。するとウリエルも二つの剣を展開して迎え撃つ。

ガキイイイン!!と剣と木刀がぶつかり合う。

普通の木刀なら真つ二つに折れる勢いなのだが、ルシファアのは全く折れずにビリビリとその衝撃が手に伝わってくる。

「ケテル様に聞いた!!貴方が仲間を失った後にたった一人で敵を全滅させたって!!どうしていつも無茶するの!?!どうしていつも一人で抱え込むの?!?教えてルシファア!!貴方は一体、何を知ったのっつっつ!?!?」

「なんで貴方が《破壊と救済の剣》なんて持つてるの?!?」

ウリエルは知ったのだ。木刀の正体は、持ち主の意思によつて全てを破壊する剣にもなれば、全てを護る事ができる剣にもなる。

「……私は私のやり方（ルール）で壊したい物を壊し、護りたいものを護る。お前らが知る必要は微塵のかけらもない。それに私が一人だと?今の私を理解し、信頼してくれる馬鹿どもがいる。そいつらを死ぬまで護るだけだ。今のお前らには言つても分かる訳がないっ!!」

サンダルフォンとメタトロンの顔がルシファアの脳裏に浮かんで

一気に木刀を振り抜き。

「ぐっ!!」

ルシファアの一振り自身諸共、数メートルほど吹き飛ばされる。

なんとか空中で留まり、建物との衝突を免れた。

(ダメージ受けてもないのに、なんて威力なの!?)

ウリエルはあの木刀、《破壊と救済の剣》の力の一部を見せてつけられた気分だった。

それにルシファーには協力者がいる浮上が出て来た。

だが、そんな事よりもルシファーの言葉でショックを受けた。

お前らには分かる訳がない。

それがウリエルの心を傷付ける。それにルシファーに特に一番懐いている天使が目に映る。

「ルシファー!! 貴方、ガブリエルをも見捨てる気なのっ!?!」

どこにいてもルシファーの隣にはガブリエルがいて、姉妹のように仲が良くして

ウリエル、ミカエル、ラファエルはそれを見ていつも微笑んでいた。

「……………」

ガブリエルの名前が出た途端に、少しの間に目を閉じ、そして開けると同時に口も動かす。悲しみの表情で。

「この天界にしがみ付いているお前らは…私にとっては邪魔な敵だ。今必要なのは、そのオーブだけだあああああ!!!」

そしてウリエル達を敵だと叫び、木刀を構えて突撃する。

ウリエルは懐に隠していた《天使殺しの剣》を出そうとしたが躊躇っている内にルシファーが目の前にいた。

そして二人は二度目の衝突に遭遇した。

衝撃のあまりに周りに煙が漂り、視界が晴れるとそこには

「…チツ」

右腕を押さえて距離を取るルシファーと

「ちっ、違うの!!ルシファー!これはっ!!」

《天使殺しの剣》を手に持ち、彼女に危害を加えてしまった後悔で慌てているウリエルがいた。

「ぐあああああああああ!!!」

ルシファーの周りから膨大なエネルギーが集まり、暴発した。

それは市街地を巻き込んでウリエルごと吹き飛ばす。

「きやあああああああああ!!!」

ウリエルはなす術なく、喰らって吹き飛ばされるとどこかの屋上に激突して意識を失った。

「はあっ…はあっ……………」

間もなくして、翼も体もボロボロになったルシファーもどこかに落ちていった。

ルシファアとウリエルが飛び去った後。

爆発の音でサンダルフォンとメタトロンの二人は急いで部屋を出るが、ルシファアの姿はなかった。

「メタお姉ちゃん!!私達も行く!!」

サンダルフォンは翼を広げて飛ぼうとしたが、メタトロンの止められる。

「待って。二人一緒は流石にマズイなの。二手に別れて追いかけたほうがいいなの」

二人一緒に捕まったりしてもすれば計画はパーになる可能性が出てくるが、ルシファアに何かあったりしたらと思うと気が気でない。

それほどに彼女達にとってはルシファアはかけがえのない存在になっている。

お互い探す方向を決め、サンダルフォンは西の方向へ。

メタトロンの東の方向へと飛んでいく。

「ルシお姉ちゃん……どっへ?」

サンダルフォンが行く所々に襲撃にでもなったかのような跡がある。

「!? きゃあつ?!?!」

すると奥のほうから物凄い音が聞こえて、その余波で吹き飛ばされそうになった。耐えた彼女は急いでその方向へと向かう。

到着した頃には視界が暗れて見渡しが良くなっている。

上空から隅々まで捜していると、ある建物の屋上で誰かが倒れていた。

「!? ルシお姉ちゃんっ!!」

ルシファーだった。

急いで急降下して着地し、ルシファーの元へ走る。

「ルシお姉ちゃんっ!! しっかりっ!!」

右腕には酷い傷があり、気を失っていた。

すぐにどこ見えない場所に運び込み、声を掛け続けようとした時。

上空から天使達の声が聞こえ、口を押さえて身を隠した。

「こりゃあ…随分と派手にやったもんだ」

「噂で聞いた事あるけど…まさか本当にルシファー様が？」

「バカっ!!ルシファア様がそんな事するわけないでしょ!!」
「だよなあ。あーあ。早く部隊結成してくんねーかなあ…」

好き勝手に喋っていきながら去って行く天使達に、サンダルフォンはぎりつと齒軋りをする。

更にその背後からは二人の大天使長がいた。

「大天使長ミカエル……ガブリエル」

そう小さく呟く。ルシファアは他の大天使長四人の話を良くしていた。ミカエルとは良く馬鹿やっていると、ウリエルは真面目過ぎてラファエルはおっとりし過ぎるとか。特にガブリエルについては妹のように可愛がっていると沢山、話してくれる。

聞いているこっちとしては嫉妬しかないが(特にガブリエルに)、ルシファアが嬉しいように話すから自然と楽しく聞いてしまっている自分達がいた。

そんな事を思い出しながら二人の会話を聞く。

「ルシさん……ウリエルさん……」

「ガブくんは…特にルシ君が心配で心配で仕方ないんだろ?」

「なっ!そんなつもりじゃないですよっ!二人共、心配ですよ!!」

ガブリエルはミカエルに怒っているように声を大きくした。

「……噂は噂でしかない。僕も噂だけで終わってほしいと思ってる。…でも、こうなった以上は調べるしかない」

「そう、ですよね…」

ニヤニヤから真面目な表情で話すミカエルにガブリエルは声を震わせる。

「ざっさとルシ君の無実を晴らして、また一緒に馬鹿やるのが僕の仕事なのだからね」
「もう、二人の後始末は大変なんですからねーっ!？」

ミカエルもルシファーが無実である事を信じている。それだけでガブリエルはホッと一安心する。

ミカエルとガブリエルがここを過ぎて行くのを確認した後、サンダルフォンはルシファーに声掛けようとしますが、

「サンちゃん…ルシ姉、見つかったのね」

メタトロンが合流した。

「うん、怪我してて…」

そう言うと彼女は顔を顰めた。

「…ざっつき、大天使長ラファエルがウリエルを見つけたなの。今頃はルシ姉を捜しているから時間の問題なの」

「こつちにもミカエルとガブリエルが来た」

早くここから離れないと

と言った時に

「…っ」

ルシファーが目を覚ました。

「ルシ（姉） お姉ちゃんっ!!」

「お前ら…まだ…」

まだ二人がいたのを驚いて上体を起こしたがズキズキと腕が痛む。

「今、治療するねっ」

サンダルフォンは急いで応急処置をとってくれたおかげで完全ではないが、大分楽になった。

礼を言い、呼吸を整えてから

「サンダルフォン、メタトロン…ここを今すぐに出ろ」

厳しい口調で二人に帰るように促す。

二人は当然のように驚き、反抗しようとするが

「……………頼むよ」

滅多に見せない、綺麗笑った顔にメタトロンは

「……わかったなの」

「えっ!?!」

素直に頷いた。それに驚いたサンダルフォンだが、直ぐにメタトロンに掴みかかった。

「メタお姉ちゃんっ！なんで!?!ルシお姉ちゃん怪我してるのにつ!!一人にしちゃうっ!?!」

ルシファーと一緒にいくと言い出す前に溝に一発いれた。

「メタ……お姉ちゃん……?」

驚愕した表情でメタトロンに体を預けて気を失ったサンダルフォンに、ごめんなのと呟いた。

「悪いな……」

申し訳ないと頭を下げたルシファーにメタトロンは首を横に振った。

「私も本当は一緒にいたいなの……でも、ルシ姉を困らせたくないから」
だから、必ず生きて成功させよう

メタトロンはそう言ってサンダルフォンを担いで飛び去って行った。

「ああ……全ては世界のためにな」

ルシファーも飛び去った方向を見つめてそう誓った。

第四話く信じたいなら最後まで信じろく

ルシファーはサンダルフォンを担いで飛んでいくメタトロンを見送ると

「さて……」

この場から逃げる前に、ウリエルから奪い返したオーブを懐から取り出した。

「……………」

虹色に光るオーブに何かの想いを込めるかのように暫く見つめるとまた閉まった。

「ガブを見捨てる……か」

あの二人の他にも妹的な存在はいた。

いつも自分を気にかけて常に心配して離れようとはしないガブリエルの姿が目に浮かぶ。

もちろん、ウリエルもミカエルもラファエルも大切だ。

それでも三人より近くにいたのはガブリエルだった。

一瞬、彼女だけをこっちに引き込むかと思つたが

自分とは違つて挫折を知らない彼女を巻き込む訳にはいかない。

本当はあの二人をも巻き込ませたくなかつたが、何言つても言う事が聞かなかつた。

サンダルフォンは兎も角、聞き分けの良いメタトロンでさえもルシファーに怒りを表して反論していた事を思い出して苦笑した。

そして、ゆっくり歩き出したルシファーは

「……何してんだかなあ……私は。だが、もう後戻りは出来ない。私には前に進むしかないんだ、やり遂げなきゃいけない事があるんだ。だから……すまないな、ガブ」

大切な妹分を見捨てても遂行する決意をした。

歩き出した彼女の目先にあるものは……

“すまないな、ガブ”

不意にガブリエルの耳にそう聞こえた気がして辺りを見渡した。

「ルシさん……?」

ガブリエルはもしかしてルシファーが近くにいないのでは、と確認しているが、どこにもいない。

「ガブ君、どうしたんだい?」

キョロキョロと見渡している彼女にミカエルは首を傾げた。

「今、ルシさんの声が聞こえたような…」

「ルシ君の…?」

今ガブリエル達が居るのは、飛空船格納庫の近くの建物の中にいる。

その近くでルシファーの姿が目撃したとの情報が入った為に、ここで集まっていた。だが、部屋はここだけで天使達しかこの場にはいない。

ルシファーがこの中に居るはずがないのだ。

「ルシ君を心配しすぎて幻聴でも聞こえたんじゃないか?」

ミカエルは冗談まじりに訪ねるがガブリエルは不安げな表情で

「……嫌な予感しかしないんです」

そう言って口を閉ざした。

流石のミカエルも真面目な顔になって天使達に命を下す。

「ここらへんにいるって事は船で逃げるかもしれない。直ちにルシファーを捜すんだ！」

天使達に搜索の他に、ルートトの包囲網を固めるように伝えて自分達も出ようとすると

ドゴオオオオオオン!!!と飛空船格納庫から爆発音が聞こえた。

「何っ!？」

「…っ!!ルシさんっ!!!」

「ガブ君！待てっ!!」

ミカエルが驚いている隙にガブリエルが爆発した方向へ飛び出した。

それに続いてその後を追う。

「何事ですか!？」

着いたガブリエルはそこに居た天使達に聞く。

「オルゴールが鳴ったと思ったら、いきなり爆発しまして…」

ゲホゲホと煙が漂う中で咳き込みながら答えているとミカエルも到着した。

「つたく！君も誰かさんみたいに人の話を聞く前に動かないでくれよっ！」

ルシファーそっくりだと言われ、あははと苦笑するガブリエルだが、

キューイーンとここにあるほぼ全部の船からエンジンが掛かり、無人で次々と発進して

いく光景に驚愕した。

「無人に紛れて逃げる気かっ!？」

天使達が慌てて追いかけて行くこうとしているのを見て我に返って続こうとしたが

「まあ、待て。ガブ君」

腕を掴まれて阻止された。

「ミ、ミカさん？」

「そう慌てる必要はないさ。『急がばわくリン取り逃がす』って言うだろ？」

「は、はあ…?」

今一、落ち着いているミカエルの行動が読めなかった。

「…そこにいるんだろ？」

そんなガブリエルを他所に、ある物陰を見つめる。

そこから出てきたのは

「…:やれやれ。やっぱりお前が見つけるんだな。ミカエル」

ルシファーだった。ミカエルの観察力に流石だと言ったような表情で二人の前に現れた。

「伊達に君と悪さしてないからね」

当然、と言った表情で笑うミカエルと

「ルシさん……っ」

困惑したような表情のガブリエル。

「ようガブ。そんな顔してどうした？」

そして、ニヤニヤと笑っているルシファー。

「……ルシ君、君が狙ってるのはあの船かな？」

ミカエルが指す方向には一隻の小型飛行船がある。ルシファーに答えを求めると「正解」と笑う。

「こちとら、急ぎなんぞな。ちよいと行かせて貰えませんかね？」

行動がバレていてもヘラヘラしているし、余裕すら感じるルシファーの態度に不信感を抱く二人。

「君は部隊を率いる事から身を引いてからおかしくなってるのは、皆分かってる……けどルシ君が意味もなく天界を敵に回してまでこんな事をする訳がない。何か僕達に隠してるんだろ？」

ミカエルもルシファーを見てきた一人だ。ルシファーという存在を充分に理解しているつもりだからこそ、彼女が何かを隠していると推測する。

「ルシさん……お願いです！話してくださいっ!!」

ガブリエルも同じ考えを持っていたのでルシファーに本当の事を話して貰いたいと

願っている。

それを嘲笑うかのようにルシファーから告げられた言葉は

「ククっ。…揃いも揃って馬鹿だな、お前らは。理由？隠すも何も、私はただ、窮屈になった天界を壊してやろうと思ったただけだ。飽きたんだよ…こんなつまらん世界にいるのは」

二人が思っているような答えではない、ただ自己満足でやっているという、身勝手なものだった。

ミカエルとガブリエルは酷く驚いていた。いつものような怠そうな表情で言ったルシファーに。

「……本気で言ってるのかい？」

「さあーな。どうだろうな？」

ミカエルは真意を確かめるように睨みつけるが、ルシファーには効果がなく表情はまるで変わっていない。

「ふざけるなよ!!ルシファー!!」

ミカエルは怒り、自分の武器である銃を現出させる。

「待って下さいミカさん！」

今にも撃ちそうな彼女をガブリエルは制止する。

「ルシさん、どうしてですか：？天界が飽きたなんて嘘ですよ。何でいつも、誰にも言わずに一人で抱え込むんですか!?!そんなに私達は頼りないですかっ!?!」

最初は冷静に話していたが、徐々に感情的になって声を上げる。

最後には泣いてしまっていた。

泣いているガブリエルを見たルシファーは困った表情になる。

妹のように接していたガブリエルには甘かった為に、泣いている姿を見るとめっっぽう弱い。

ミカエルも銃を下ろし、彼女の様子を伺っている。

だが、ルシファーもここで折れる訳にはいかなかった。

「……死にたくなきゃ、そこを退け。ミカエル、ガブリエル」

声を低くし、殺気を放ちながら木刀を二人に向ける。

「なっ……!」

「……っ!」

急に尋常じゃない殺気が二人の動きを止める。

体が竦み、上手く動けない状況に戸惑いを隠せない。

ルシファーはそんな二人をよそに木刀を肩に担いで船へと歩く。

「そんなんで私を止める気だったのか？大天使長が揃いも揃って甘く見過ぎなんだよ」

二人を通り過ぐし、彼女はそう言つて船の前まで行く。

「なあ」

ルシファーは船に乗る前に未だに動けない二人の方に振り返る。

「…お前達だけは変わつてくれるなよ?」

ふんわりと笑い、そう言つて乗り込んでエンジンをかける。

「待て!ルシ君!!」

「ルシさん!!行かないでっ!!」

漸く動けた時にはもう遅い。

二人の呼び止める悲痛な叫びはルシファーには届かない。

飛行船はそんな二人を無視して飛びたつて行つた。

「……見たか?ルシ君の顔を」

「はい…優しい笑顔でしたね」

去り際のルシファーの表情は優しかったと二人は確信する。

「天界を出るゲートは一つしかない。手は打つてある…けど」

「…?」

ミカエルは彼女ならやりかねない事を一つだけ思い浮かぶ。

「ルシ君なら…死ぬ覚悟で嵐の中を突き進んで行くかもしれない」

「…っ?!まさか!」

ガブリエルはミカエルの言葉を理解して気付いてしまった。

「……もし、突き抜けたとしても。流星のルシ君でも堪えるだろう。そこにつけ入るしかない」

ガブリエルは不安げな顔でルシファーが行った場所を見つめる。

「それに、やっぱり僕はルシ君を信じるよ。飽きたから壊すとか、ルシ君はそんな理由であそこまでしない。…天界で何かが起きている…それをルシ君は気づいてるんだろかね」

ミカエルは天界で不穏な動きがあると推測してルシファーはそれに気づいていると確信している。

「僕だけじゃない。きつとラファ君やウリ君だって同じ気持ちさ。ガブ君、君が一番近くに居たんだ…わかるだろ?」

ガブリエルはミカエルの言葉を聞いてルシファーとの思い出を振り返る。

「私も…何があっても絶対にルシさんを信じています!!」

ルシファーから妹のように可愛がってもらった自分が信じなくてどうするんだと心の中で叱咤し、決意を表した。

「…その意気だよ」

ミカエルはその表情に安心したところで

「……大天使長ミカエル、ガブリエル。貴方達にはルシ姉の所には行かせない」

フードを深く被って正体を隠している者が現れた。声からにして女性だとわかる。

「貴方は……？それにルシ姉って……」

ルシファーを姉として慕っているような言動にガブリエルは戸惑った。自分以外にもその存在がいた事に

「貴方達四人は……ルシ姉の計画には必要ないなの。特にガブリエル……貴方が一番、ルシ姉に支障が出てしまう」

「……え？」

「ガブリエル。今のルシ姉を知らない貴方はあの人には必要ない」

「!!そんなっ……!!」

ガブリエルは愕然とする。

「貴方の事をあの人が一番に気にかけてる。とても大事にされてるのはわかっているつもりなの。でも、ルシ姉の隣には私達がいる。今ルシ姉が頼っているのは私達なの。貴方達じゃない」

少し殺気を込めて強く言った女性に更にガブリエルはますます戸惑い、ミカエルは不信感を露にする。

「君はルシ君が何をしようとしてるか知っていて一緒に行動している共犯者か。いつの間にもルシ君と親しくなってるみたいだが……そこまで言われる筋合いはないと思うんだけど」

ミカエルは怒っているように睨みつけるが

「……………もうルシ姉の邪魔しないで」

何ともないように忠告はしたから、と言って煙幕を張った。

二人は手で目を防ぎ、さきほどいた女性の場所を見るとすでにいなかった。

「ガブ君……僕はアイツの言うことは聞かないよ。ルシ君と直接会って見定める。……最悪は対峙するかもしれないけど」

「私事です。ちゃんとルシさんの声での真意が知りたい」

何と言われようと二人の決心は揺るがなかった。

『おう、どうしたお前ら？どっからかの襲撃にでも備えてんのか？』

天界の外に繋がるゲートには大きな飛行船が守るように立ちふさがっていた。

「る、ルシファア様!!どうしてこのような事を!？」

モニターに映る彼女を見て天使達は動揺している。

『つたくよオ、どいつもこいつも同じ事言いやがって』

彼女は勘弁してくれとでも言うような表情になった後

『面倒だから簡単に言うぞ。私は私の護りたいものを護る為に動いてるだけだ』

ニツコリと笑った。

「う、撃てええええええ！」

その笑った表情にゾクリと悪寒が走ったのか一人が迎撃するように命令するとミサ

イルが発射された。

発射されたのを見て

「短気だねえ」

向かって来たミサイルを避ける為に機体を動かす。

が、それに合わせてミサイルも追ってくる。

「追撃型か…」

ルシファーは少し考えた後、上空に機体を飛ばすと雲に向かって急降下した。

「こんなところで死ぬわけにはいかないんでね。無理にでも突破するしか、ねえよな!!」

自分もどうなるかわからない嵐に突っ込んでいく。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

雷が鳴り響き、機体からもアラームが鳴っている。

(頼むから…保ってくれよ…)

ルシファーは意識が薄れていく中、それしか頭になかった。

く妹達の動きく

「…はっ!」

ガバっと目を覚まして勢いよく起き上がって辺りを見回すと、毎日見覚えのある風景。つまり自分の部屋だということがわかった。

「あつ。サンちゃん、起きたんだ」

「…メタお姉ちゃん」

そんな自分の部屋のドアを開けてこちらを見てきたのは姉のメタトロンだ。

まだ姉にやられた所が痛いのか、「イタタ…」と手で抑えている。

それを見て申し訳なさそうにして

「ごめんなの…。でも、こうしないと意地でもルシ姉に着いて行つてたでしょ?」

困つたように答えた。

「どうして…? 私達にとって…ルシお姉ちゃんは! 天界よりも大切な存在でしょ!」

下を向いてグツと拳を握つて悲痛に訴えてくるサンダルフォンに更に困つた顔をした。

「ルシ姉にはヨエル君に任せた。まあ、直ぐにバレるとは思うけど……それにヨエル君もルシ姉の事は大好きだから」

ヨエルとは水色のウサギのような形をしたメタトロンの相棒でもある。サンダルフォンにもエリヤと言う、ピンク色でヨエルと同じ形をした相棒がいる。

「それに……私達には私達のやるべき事があるから」

その言葉によろやく顔を上げたサンダルフォン。

「そうだねっ……でも疑われてないかなあ……あの人に」

不安そうにする妹に姉も黙ってしまった。それもその筈だ。自分達のいる管轄から離れていたのだから上司や他の大天使長達にも疑われても仕方がないのだ。

どうするか考えようとしていると

「サンダルフォン、メタトロン。それはどういう事ですか？」

いきなり現れた声に二人はビクツと体を震わせた。

「あつ……」

その声だけで二人は顔を青ざめていく。

「ルシファーと聞こえてきたのですが……どうやら、貴方達は何かに首を突っ込んでいますよ、どうですか？」

緑色をした髪に紫色の綺麗な目を持つている女性が腕を組んでこちらを見ていた。

「…ザドキエル」

メタトロンは同じ大天使長である彼女の名前を言った。

「…安心しなさい、ここには私個人で来たので。ただ、このまま何か隠すと言うのであれば…報告せざる負えませんが」

彼女はどうかやら命令でここに来たわけではないらしい。

それに真剣な眼差しを向けている為、嘘ではないと判断した。

「わかったなの。でも…」

メタトロンはならばとこう発言した。

「話す代わりに、貴方に協力してもらおうなの」

「め、メタお姉ちゃん!? 本気なのっ!?!」

妹の方は驚いていたがザドキエルは目を鋭くした。

「ルシファーと言えば、今や天界に逆らった反逆者とされていますが…それに協力しろ、と?」

ルシファーを反逆者呼びをしたその彼女の言葉に姉妹はキツ、と睨みつけて何かを耐えるようにしている。

「……そう言う訳ではなさそうですね」

それを見て、ルシファーを反逆者にするのには間違っているのかもしれないと少し思ってしまった。

「では、話を聞きましょう。ルシファーが、貴方達が何をしようとしているのか。私が協力できるかどうかは…それからです」

ザドキエルは二人の話を聞く事にした。

二人は話を聞いてくれる彼女に警戒しながらもゆつくりと口を開く。

そして、真相を聞いたザドキエルの答えは……

「ガブ…お前はもう私に関わるな」

「え…？な、何を言ってるんですか？」

「もう…お前はもう妹でもなんでもないんだよ。私の妹はあの二人だけだ。ガブリエル、お前はもういらないんだよ」

「ル、ルシさん…？いきなり変な冗談、言わないで下さいよ!!」

「気安く私の名を呼ぶな」

「っ!!」

「じゃあな。もう会うこともないがな」

「そ、そんな…待ってください!!」

「ルシさん!!……ルシさああああああああああん!!!」

『オイっ!!ガブ君っ!!聴こえてるかあっ!!』

「……っ!?!」

機内のモニターからミカエルの顔が映っていて怒りの声が響いてハツと気が付いた。

『ガブ君…君、泣いているのか?』

え?と最初は分からなかったが、頬に何か冷たく感じて触ると濡れて湿っていた。

「ごめんなさい…何でもないんです」

涙を拭ってニコリと笑って答えるガブリエルに

『……そうか』

深追いをしないでそれだけ返したミカエル。

そんな彼女にガブリエルは感謝した。

それもつかの間。

『アイツの言つた事は気にしないでいい。ルシ君は何があつても君を見捨てたりしない。幾度も馬鹿やつてきたんだ。それくらいわかるさ』

自信のある表情で堂々としている彼女に思わず笑みをこぼす。

“今のルシ姉が頼つてるのは私達なの。貴方達じゃない”

“もう、お前はいららないんだよ”

あの女性と頭の中のルシファアの言葉がまだチクリ、と心に刺さっているが、ミカエルらしい言葉に少し和らいだように感じた。

(ルシさん…貴方が私を必要としなくても、私には貴方が必要なんです。だから…)

「知つてますかルシさん？私は諦めが悪いんですよ」

(もう、昔のような弱い自分じゃない事を守られてばかりじゃない自分である事を証明してみせます!!)

ガブリエルがいつも以上に強い意志を持った表情をしているのを見て

『ルシ君の居場所の特定、頼んだよ』

安心してミカエルは彼女にそう頼んだ。

第五話～軽い気持ちで他人の過去を見るもんじゃない①

（

煉獄。

石を積み立て城の様な建物を造ろうと地道な作業をしている黒い毛だまのような集団、クロツチという種族がいた。

その中で一回り大きいクロツチがいる。

キング・クロツチ。集団をまとめ上げる長だ。

「積み重ねて五百年…ついに夢を果たす時かきたつチ!!」

「チーっ!!!」

その一言に集団も歓喜に包まれる。

キング・クロツチは蒼く光る宝石のような物を一番上の空洞に嵌めると光輝き、れっきとした城。キング・クロツチ城が完成した。

より歓喜が増し、全体が嬉し涙に包まれる。

突然、悲劇は起こる。上空から小型飛行機が真つ逆様に落下してきたのだ。城に向かつて。

「駄目だっチー!!こつちに來るなっチ!!」

それも敵わず無残にも城にぶつかり、崩壊した。

間一髪避けたキング・クロツチはガツクリと肩を落とした。

落下した飛行機から出てきたのはうつ伏せの金髪の女性と

「これは!?オーブだっチ!!」

虹色の玉であるオーブが転がっていた。クロツチ達も悲鳴を上げた。

とりあえず顔を見る為に仰向けにする。

「こいつ、大天使長じゃないっチか?名前は…忘れたっチ」

一匹がそう言うときング・クロツチは考えた。

オーブを持ってこつちに來たと言う事は何か悪い事をし、追われて逃げてきたと言う

筋書きが頭に浮かんだ。

ならば、こいつの心を除けば何か分かるかもしれないと思った。

「シンクロっチー!!」

思い立ったが期日。王にしかできない芸統な技を使い、魂を半透明化した自身に預け、女性の身体に入って行こうとすると三匹のオマケが付いてきた。今回は仕方なく連れて行く事にした。

任務で暴れている魔物の討伐に煉獄に来ていたサンダルフォンとメタトロンの二人は窮地に立たされていた。

引き連れていた仲間達も殆どがやられ、相棒の二人も疲弊していた。その周りを魔物達は囲んでいる。

「ハア…ハア…これはヤバイかも…」

「こうなつたら…契約して、最大出力で…」

「だ、ダメだよ！そんなことしたらメタお姉ちゃん…死んじゃうよ!？」

最後の手段としてメタトロンは相棒のヨエルとの契約で最大限に力を得ようとするが、サンダルフォンは泣きながら止める。

「これで、サンちゃんを守るなら…」

「嫌だよ！私から居なくならないですよ…！ずっと一緒にいたいのだ!!」

自己犠牲を厭わない姉は大声で叫んだ。

「生きる時も一緒。死ぬ時も一緒…だよ?」

メタお姉ちゃんと一緒なら何も怖くない。

ニコリと笑う妹にメタトロンは漸く馬鹿な考えをしていた事を自覚した。

「グオオオオオオオ!!!!」

魔物達がトドメを刺そうとしている。だが、もう抵抗しようとはしない。

二人一緒なら、死んでも怖くない。

姉妹はその覚悟で目を瞑る。

「待て待て待てええええええええええええええええええええええええ!!!!」

誰かの叫び声とザシュつと斬られた音が聞こえた。

「…え？」

斬られたのは姉妹でも、!!二人の小さな相棒でもない。

「うおおおおおおおおお!!!!」

目に映ったのは。!!

背中に白い六枚の翼を広げ

金色の長い髪を靡かせ

自由自在に木刀を振り

魔物達を真剣を使ったかのように

斬り伏せている

美しい女性の姿だった。その女性は姉妹と小さな相棒を守るように魔物に立ち塞がる。

「つたく。ウリエルが働けつてうるさくてサボる為に下に降りて来たってーのに…こつ

ちの方が面倒な事起きてんじゃないか」

こんななんたって聞いてないぞ。

はあ…とため息を吐いた後、首だけサンダルフォン達に向けた。

「お嬢さん達、大丈夫…じゃななさそうだな。ギリギリだったな」

それでも無事である事にホツとしたように紫色をした瞳の目を細めた。

その容姿に気づいたのはメタトロン。

「貴方は…もしかして」

「グアアああああああっっっ!!!」

その名を言おうとしたところで、生き残りが仲間をやられたことに腹が立つたらしい。女性に向かって突進してきた。

「まあ、なんだ…自己紹介は後だ。すぐに終わるから待つてろ」

そう言つて彼女は宣言通りに直ぐに終わらせた。

「す、凄い……!」

サンダルフォンは魔物達をたった一人で圧倒的な実力差を見せつけて全滅させた彼女に驚きを隠せない。

メタトロンは納得したかのように冷静に見つめた。

「あーあ。ボーナスでも出ないと割にあわないぞこりやあ。…その前に勝手な事をし

たつて怒られるな」

うわあ…とテンションが下がった彼女は振り向き、姉妹に近づいた。

「ありがとうなの…ルシファー先輩」※この小説では新天使達は各属性の旧天使達の後輩になってます。

「…よく見たら、後輩じゃん。メタちゃんよお」

名前を当てられて目を見開いたが、彼女の姿を見て思い出したルシファー。

「え!? 貴方がルシファーさん!?!」

キラキラと目を輝かせるサンダルフオンに若干、引いた。

「お、お。オマエがサンダルフオンか。メタちゃんからよく聞いてんぞ。大変だなあ? こいつ、滅茶苦茶シスコムガツ!!!」

「ル、ルシファー先輩! 余計な事言わないなのっ!!」

ルシファーが言い切る前に慌てて口を押さえて冷や汗を流すメタトロンにサンダルフオンは首を傾げた。

ルシファーが苦しそうな表情をしているのに気づき

「あの、メタお姉ちゃん…ルシファーさん離してあげて…」

姉に困ったように言うのと、ハツとしたように手を離す。

「つつつはあっ!! オマツ押し付けんの強すぎ!! 窒息するわコノヤロー!!」

「ご、ごめんなさいなの…」

少しシユン、としたメタトロンにルシファアは

(しっかりしてるようで抜けてるところあつからなあ。この子)

「オマエらしいところは変わってなくて何よりだ」

彼女の頭を優しく撫でて微笑んだ。

「エリヤ達、空気リヤね」

「そうエル…でもルシちゃん久しぶりエル!!助けてくれてありがとうエル!!」

小さな相棒であるエリヤとヨエルは空気になっっている雰囲気苦笑いし、ヨエルはメタトロンの相棒なのでルシファアと面識がある。

「うわっ。急に飛びつくなよ…」

お礼と一緒に肩に飛びついた。

ビックリしながらも嬉しそうに引っ付く子供のような彼を受け入れた。

主であるメタトロンは羨ましそうに見ていた。

そこにゴオオオオ!!と空から一機の大きな飛空船が姿を見せた。

「げっ…」

それを見たルシファアは嫌そうにする。地に着陸して中から下級天使達が出てくる。

「ルシファア様あつ!!貴方は大天使長である事を自覚してんですかああああ!!?毎度、毎

度抜け出して…特にウリエル様の鬼のような形相はどの位見て来てると思ってるんですかあ!!それに煉獄は今、紛争起こしてんの知らないんですか!?”

「い、今初めて知ったよ。まあ、この辺の片付いたし…終わりよければ全てよし、だろ?’
「んなわけないでしょおおお!!!我々がどれだけ貴方の心配をどれだけしてるか、苦勞してるかわかってください!!!”

「お、おお。悪かったよ…!”

それからガミガミと続く部下達の不満と説教にゲンナリしていく彼女にいつの間にか離れていた二人は苦笑した。

「ルシちゃんも変わってないエル」

「そうだね…やる気時は凄くカッコいいのに。締まらないのがルシファー先輩なの」

でも、自分達の知っているルシファーで良かったと思つた。

それにせっかく会えたのにすぐに離れたくない。何故なら彼女を勝手に姉のように慕っているから。

「やあーつと終わつたよ……”

とても疲れたようにルシファーはメタトロンに目を向ける。

「じゃあ…またな」

ポン、とまた頭に軽く手を当てて直ぐに離れた。

「あ……」

それが嫌で彼女の袖を掴んだ。とっさに掴んだので思わず顔を下に向けた。

「……………どうした？」

ルシファーは不思議そうにしゃがみ込んで覗こうとする。

「まだ…一緒、いたい…なの」

それを言ったメタトロンの顔は茹でダコのような真っ赤になり、抱きしめたくなるほどの可愛らしさに

(見ないうちに何でそんなキュンとなるような仕草を会得してんのオオオオ!!!可愛いよメタちゃん!!クソオオ!抱きしめたい!!!いいよね!?!いいよね!?)

悶絶しながら欲望と葛藤していた。

「……………駄目、かな?…ルシ…姉さん」

トドメに目を潤ませ、自分を姉さんと呼んだ。プツン、と理性が切れてヨエルごと抱きしめた。

「じゃあ…私の妹になるか？」

「うんなの!!」

フツと笑って優しく答えた。すると嬉しそうに頷いた。

「じゃあ、少しなら大丈夫だろ。私んところ来いよ」

(駄目な訳ないだろおおおお!!ごめん、ガブちゃん…妹が増えました)

実際は興奮していた彼女だった。

「これって、私もルシファアさんの妹になるって事だよね？」

「そうなる…リヤ？」

姉のあんな姿をみて二人は混乱した。

第1セフィラに戻ったルシファアは、双子姉妹を自分の家に入れて後で、食料を持ってくると言つて仲間のいる基地へと一人で向かった。みんな、素顔さらけ出して好き放題飲み散らかしていた。

一人の男性がルシファアが帰つて来たのに気づいた。

「お、ルシファア様あ!!お帰りなさい!聞きましたよお?また無茶苦茶やつたんですねえ!!酷いですよ、一人で暴れるなんて…我々を少しは頼ってくださいよ…!!」

酔っているのか、足が覚束ない。

「なら、飲み比べで私に勝つてみろよ」

ニヤつと笑うと大きめな樽を掲げる。

「上等ですよお!!」

男性は挑発に乗り、同じサイズの樽を掲げた。周りもいい感じに盛り上げる。数分後。

「ま、参りましたあ…」

「いや～まだまだだね。酒も、実力も。もっと強くなつてからでかい口叩けつてんだ」

先に潰れたのは男性の方だった。後から来たとはいえ、彼女は男性の数倍の量を飲み干した。

おおく!!流石ルシファー様つ!!次は俺だつ!!私だつ!!

と次々に挑戦してくる者がいたが、誰も敵わなかった。

ルシファーはそんな部下達の姿に呆れた。

「全く…情けないな…でも」

ゴクツと新しい酒を一口飲み

「それでも、無理してでもお前らを守りたいんだ」

ボソツと呟いた。

「るうううしいふあああああああ!!」

バタン、と大きくドアが開くと同時に聞き覚えのある怒声が耳に入ってきた。

「ウ、ウリエルさあん…何の用でございますでしょうか？」

覇気を纏って近づくとウリエルに冷や汗を流しながら後ろに下がる。

「…私もいますよ。ルシさん」

「うげっ!?が、ガブちゃん…」

ウリエルの後ろには更なる般若がいた。妹な存在、ガブリエルだ。

滅多に怒らないガブリエルがこんなに怒っている。

理由はわかつている。それでも捕まるわけにはいかない。

ルシファーは紫電を右手に纏い、天井に放って穴を開けた。

そして、そこから

「あっ!!待て!ルシファー!!!」

「待つてください!ルシさん!」

逃げた。二人はすぐ様、追いかけた。

「だああああ!!!何処まで追いかけてくんのだあ!!!」

「貴方が反省するまでよ!!」

「あーハイハイ。反省しましたー二度と勝手な事しませーん。許してくーだーさー

いー」

「完全に馬鹿にしていますよね!?それ!!」

空を飛び回っている三人の天使を二人の天使は見ていた。

「あつははははは!! やっぱりルシ君は最高だねっ! 流石、僕の相棒だ!」

「ミカエルさん、感心しないでください!」

ミカエルは豪快に笑い、ラファエルはそんな彼女を盛大に呆れ返っていた。

結局、ルシファーはウリエルとガブリエルに捕まり、ダブル説教と言う拷問を受けた。ポロポロになった彼女は基地から余りの食糧を持ち、癒しを求めて双子姉妹の待つている自宅へと帰って行った。

一週間後。

「はあ? 調査だあ?」

ルシファーはウリエル達四人と自分の基地で寛いでいる所に部下が入り込んできた。

「何やら…また煉獄で怪しい連中が動いているとの事でした」

それを聞いたルシファーはウリエルを見る。

「そんな報告来てないけど…」

「あ、ルシファー様の軍で、との事ですが」

ウリエルは知らないと言った瞬間に部下はすぐに補足した。

「……それは私も行かなければいけない事案か?」

真意を探るような目に慌てて口を開く。

「そ、その事なんです…我々だけでやらせてはくれないでしょうか! ウリエル様方に

も知らされていないと言う事は現段階ではそこまで大した事案ではないと言う事。それにルシファア様の力を頼る前に小さい内に叩いてみせます!!」

自分達の熱意をぶつけ、負けずに力強い目で彼女を見る。

自分達だってルシファア様の力になりたい。頼りにされたくて厳しい訓練や実戦を乗り越えてきた。

足手まといとは思われたくない。

そんな熱意に折れたのか。

「……わかったよ」

目を伏せて行かせる事を許可した。

「!本当ですかっ!!」

「ああ。これだけは約束しろ…一人も死なずに私の元に帰って来い。頼りにしてるから言ってるんだからな」

「はいっ!必ずしや、その約束守って見せましょう!!」

その言葉が何より嬉しくて大声で返事をしてその場を去って行った。

「……アイツらも逞しくなったもんだな」

「嬉しい?ルシファア?」

フツと笑うルシファアにウリエルは微笑みかける。

「アイツらは芯の通った強い魂を持つてる。そう簡単に砕かれやしない。いつの間にかそこまで信頼を置いてしまってたんだ」

嬉しい以外、何があるってんだ？

すごく嬉しそうに部下が去って行ったドアを見つめる。

ウリエルもガブリエルもミカエルもラファエルも安心したように彼女を見る。

その選択こそが最大の間違いだったと気付く事は誰一人も居なかった。

第六話　軽い気持ちで他人の過去を見るもんじやない②

)

翌日。

ルシファアは部下達の出発を見届けた後、自宅へと帰って寛いでいた。

「ルシお姉ちゃん」

「ルシ姉」

突然の双子姉妹の訪問に彼女は苦笑した。

(随分と懐かれたもんだ)

メタトロンとは後輩として可愛がってはいたが、サンダルフォンにまですぐに懐かれた。

ウリエル達に見られてたら何を言われていた事やら。

(こんな姿見たら、ガブがどう思うかな?)

自分に一番懐いているガブリエルがどんな表情をするのか想像していると自然に笑みがかぼれる。

「まっ、遅くならんうちには帰れよ」

「はい」

とにかくルシファーがわかるのは三人が可愛すぎて、癒されるということだった。

ルシファーの心の中の一つを覗きこんだキング・クロツチ達は最初に思っていたものとは違っていた。

犯罪に手を染めた罪人ではなく、誰よりも仲間を大切に想い、失わないように護り抜こうとしている。そんな優しい心と強い魂を持ち、大勢から慕われる大天使長の姿を目の当たりにした。

「……………いつ、いい奴ツチね…でも、なんであんな風になつてるツチか？」

そんな彼女がどうしてあんな傷だらけでここに来たのが謎だった。

「もう少し覗いてみればわかるかもしれないっチ」

悪い奴とは思えなくなったキング・クロツチはルシファーと言う存在をもっと良く知る為にさらに深く心の中に入っていく事を決めた。

ルシファーは内心、爆発しそうになっていた。

「メタお姉ちゃんばっかりずるい!!」

「サンちゃんだつて私がいけない時にルシ姉と寝てるなの」

ベッドで休んでいたところに両端からの窮屈感を覚え、目を開けようとするが二人の
声が聞こえた。

両端からギユウギユウと抱きしめられて身動きが取れない。

(うおおおおっ!?!何これ??こんなことガブちゃんにだつて恥ずかしがられてしてくれないの!!嬉しいけどね!?!動けない私にどうしろつてんだああああ!!!)

まさに悶絶どころか爆発寸前だった。

そんなやばい状態になっているルシファーを二人は知らずに腕を引つ張り合つて
ま
だ争っている。

ガタンと外から音が聞こえてピクツと反応した。

二人も音に気づき動きが止まる。

「…ちよつと見てくる」

ウリエル達ならばすぐに声をかけるのだが、それが無い、

ルシファーは不信感を露わにしながら二人をその場に置いて部屋を出て、外を確認す
ると

「なっ…!」

自分の隊の一人がボロボロになって倒れていた。

「おいっ!! しっかりしろっ!!」

「ル、ルシファー…様、すいません…:まんまとやられました…」

息も絶え絶えにした隊員はなんとか伝えようとする。

「もう喋るな! サンダルフォン!! メタトロン!! コイツを頼むっ!!」

ルシファーは黙らせ大声で二人を呼ぶ。

非常事態だと察した二人はすぐ様駆けつけると顔を顰めた。

無数の傷だらけで血まれになっている。生きてるのが不思議だ。

「ルシ姉さん、これは…」

メタトロンは悲痛な声を上げるが

「そんな事は分かっただよ…:!!」

彼女も分かっているようだ。そして怒りでどうにかなりそうだった。

ルシファーは翼を広げて飛び出して行った。

「ルシお姉ちゃん!!」

「ルシ姉さん!!」

二人は止めようとしたがもう遅い。すぐに追いかけてしようとしたが、声が聞こえる。

「君達にお願いがっ…:ルシファー様を…守ってください…」

「……………っ!!」

それが最期の言葉だった。

(クソっ！私も行けば良かったっ!!おかしいとは思ってたんだっ！)

場所は彼らが行く前には聞いていた。

しかし、ウリエル達には知らせずに自分のとこに来たのか。

こう言うケースは初めてで怪しいとは思っていた。

でも仲間の強い意志を無碍には出来なかった。

目的地である洞窟のような場所に着いた。

中に入っていく。段々と血の匂いがし始め、ピチャッと足元から聴こえ、それを見るとそこは血溜まりだった。これは仲間のではないと無理やりに思い込みながら奥に進む。

たどり着いた先は

「あ…………」

地獄絵図だった。敵もそうだが、多くの仲間が串刺しにされていたり、横たわっていたりしていた。

「ああああああああああああっつっつ！！！！」

膝から崩れ落ち、これ以上なくらいに叫びあげた。

「ルシファー様……」

息があるのが一人いた。彼女はすぐに駆け寄る。

「畏、でした。待ち伏せされました。奴らの狙いは……貴方なんです」

つまりは敵の術中に嵌められたということだ。

そんな事よりもルシファーは言いたい事があった。

「畏だとわかったなら何で逃げなかった!？」

彼らなら出来た筈だ。なのに何で。

「言った、でしょう。俺達は貴方の役に立ちたかつたんです。……貴方の役に立って死ぬるのなら……これ以上の、幸せは……ない……です」

そう言つて息を引き取つた。

「……………馬鹿野郎だ。本当に……」

彼女はただ仲間達が居ればそれで良かった。

自分の幸せを壊した奴らを許せる筈が無かった。

近くで何かが動いた。

……敵がまだ生き残っていた。ルシファーは一瞬で近寄り頭を掴み上げた。

「壊す前に、吐け。洗いざらい全部だ」

「ぐっ…だ、誰が話すかつ!!死ぬのはオマエダっ!!」

「どうやら話すつもりはないらしい。」

「そうか。なら、死ね」

グシャッと頭が潰れた。彼女は何も思わずに死体を投げ捨てた。

洞窟を出ると大勢の魔物が出迎えていたのを見てニヤリと笑った。

探す手間が省けたからだ。

「安心しろ。吐くまでは全部は壊さないようにしてやる」

木刀を持って敵を見据える姿はまさに夜叉（おに）のようだった。

数分後。

一匹だけ息がまだあるボロボロになっている敵と無傷で木刀を突きつけているルシ

ファーしかなかった。

「…吐く気になったか？」

「吐いたところでどの道助からない。そうだろう？」

「……」

分かっている事は答えない彼女に肯定と見なしてフツと笑った。

「いいだろう。お前の敵は俺達だけじゃない。もっと身近にいる」

そこで心の中を見る事に限界が来たのだろう。ガラガラと崩れていくのが分かる。キング・クロッチ達は早急にルシファアの体の中から脱出した。

戻ってきた彼らを待ち受けていたのは

「ルシ姉に…何をしたの？」

心の中にも出てきたルシファアの後輩で妹のメタトロンが睨みつけていた。

「コイツの心の中を覗いたっチ」

「！」

全部白状するとメタトロンは更にキツく睨む。

「…うっ」

するとルシファアが呻きを上げて目を開け、上体を起こす。

「ルシ姉えっ!!!」

メタトロンは涙を零しながら力強く抱きしめた。

「うおっ?!メタちゃん!?!…:…じゃないな。ヨエルだな?」

「えっ!?!何で分かったエル?!?って、あっ!!」

アツサリと見抜けられ、本来の口調に戻ってしまい、メタトロンもといヨエルは変身を解いた。

「メタちゃんはそんなに泣かないし、積極的じゃないからな。サンちゃんだったらバレ

なかったかもな？」

シユン、落ち込んだ彼をよしよしと宥める。

「サンメタに何か言われたんだろ？…心配しすぎなんだよアイツらは。まあでも、ありがとうな」

こうやって誰か一緒に居てくれるのは彼女自身も心が安らぐし、嬉しくなる。

「あつ!!そういうえばザドキエルが協力してくれてるエル!!」

「……はあ？」

ルシファーはヨエルの発言に意味がわからなかった。説明を求めると

サンメタ宅にザドキエルが個人的に訪問していて、それに気付かずに二人は、これからについて話してしまっていた所を追求されたらしい。

白状し、メタトロンが話を聞いた上で協力してほしいと頼んだ。

ザドキエルはそれを承諾したという。

「ザドキエルってたしか、ガブの後輩だよな？如何にも真面目そうでウリエルタイプの天使だよな」

そんな奴がコツチにくるとは…

「メタちゃんも侮れないねえ」

（もう一人だなんて思わないでっ!!私達は死なない!!居なくならない!!ルシ姉を裏切ら

ない!!信じてなの!!私達が必ず、貴方が進む道を切り開いて見せるから!!ルシ姉も私達の前から居なくならないでっ!!!)

随分と遅しくなったもんだ。あの時を思い出して彼女は苦笑した。

「ヨエル、ちつと予定変更だ。メタちゃんとサンちゃんに伝える」

彼の耳にボソつと内容を吹き込む。

「本気エルか!」

「私はやると決めたらやる女だぜ?それに抱き込めれるならその方が有利に進めれるもんだ」

驚いている彼に本気だと頷くルシファア。

「わかったエル…ルシちゃんの思うままに」

納得したヨエルは飛んで行った。

「大天使長ルシファア!!我輩の名をキング・クロッチ!勝手ながら、心の中を見させてもらったツチ!!」

今まで空気だったキング・クロッチが話しかける。

「……で?」

無表情で見つめる彼女に冷や汗をかきながら続ける。

「微力ながら協力するツチ!!我輩達も入れてくれたら、その傷が消える場所を教えるツチ」

「チよ!!」

ドーンと胸を張ってという彼に疑う気になれずに笑って
「なら、頼むは」

そう言って立ち上がった。

そして

「ようやく、見つけましたよ。ルシさん」

「待ってろよ、ルシ君」

ミカエル、ガブリエルも彼女を追うために動きだした。

第七話（協力者）

「ザドちゃん、ちよつといいかな？」

「サンダルフォン……なんですか。その呼び名は？」

自分の所にサンダルフォンが来た。

変な呼び名された事に眉間に皺を寄せるが、彼女が自分の所に来たということは何かしらの動きがあつたかだとザドキエルは思った。

「協力する仲なんだし。これくらいいいと思うなあ」

ニコリと笑っている彼女に、ハアとため息を零してしまった。

「それでね？真面目な話んだけどね」

可愛らしい笑顔から真面目な表情で見つめてきた彼女にザドキエルは緊張が走った。

「ザドちゃんには、煉獄に行つてもらうよ」

「それはメタトロンが言つたのですか？」

その指示は姉からの伝言かと思われたが、首を横に振った。

「ルシお姉ちゃん直々の命令だよ」

「っ!？」

まさかの本人からの勅令だった。姉妹二人がルシファアの居場所を掴み、ザドキエルがこちら側にいる事を伝えたのだろう。

そしてルシファアはそれを上手く使おうとしている。

「おそらく、ミカエルとガブリエルが動いていると思うんだ。だから、貴方は……」
「ガブリエルの援軍だと装ってもらいたいのに」

サングルドフォンはニコリと笑う。

笑ってはいるが、目は本気だ。

逆らえば容赦なく殺しかかってくる。

ザドキエルはそう確信した。

「……わかりました。それにこれは私の判断で貴方達に着いて行くと決めましたから。裏切ることなく果たして見せましょう」

だからこちらも本気の意志を示す。

「そっか。ザドちゃんがいってくれて助かるよ」

それが伝わったのか、表情を和らげた彼女は去って行く。

「……先輩を騙すのは気が進みませんが」

やるしかない。

ふう、と一息入れて彼女は動きだす。

そして

「貴方は……」

ザドキエルはガブリエルの目の前に姿を見せた。

「先輩。反逆者であるルシファーを捕まえる為に協力することになりました」

冷静に非情にするように冷たい言葉を吐いた。

「そんな言い方……!」

ギリッと歯をくいしばる彼女。

「何も間違っていないとは思いますが」

「ルシさんは何かを隠してらんです!!」

あまりに必死な先輩に知ってますと口を開きそうになるのを我慢する。

「隠しようが、彼女は過ちを犯しているんです。捕まえるのは当然でしょう……彼女

はもう堕ちた天使なのです」

すいません、ルシファーさん。

ザドキエルは心の中で謝りながらもガブリエルに冷めた目線を送る。それに負けずに睨んでぐる。

彼女は何がなんでもルシファーを信じているのだろう。

「それに捕まえれば、貴方が知りたい理由もはっきりすると思いますか?」

「…………」

何か言いたそうな表情をしているが今は言い合っている場合ではない。

「それに言い合つては時間の無駄です。では、行きましょう……煉獄へ」

「……そうですね」

苦しそうにした表情で頷いた彼女は知らない。

後輩がルシファー側だということに。

傷を治す泉があるとキンググロッチ達にその場所に連れていかれ、服を脱いで入ろう
としている所を覗こうとしている彼らをルシファーはボコつた。

しばらくして

「本当に上手くいくつちか……?」

癒えた彼女が行動するのを見てキンググロッチは不安そうな顔する。

「上手くやるしかないだろ。私かもし、死ぬような事があつても……出し抜けるだけ
も良い方だろ」

こればかりはルシファーでもわからない。

ただわかるのは一人じゃなく、仲間がいる。

だから上手くいく事を信じるしかない。

ルシファーはキンググロッチ達に微笑みかけるとなんとも言えない表情で見られた。その時

風に操られたナイフが飛んできた為に木刀で防いだ。

「……見つけましたよ。ルシさん」

ガブリエルとその軍隊。

「随分な挨拶するもんになったなあ。ガブちゃんよお」

ルシファーは悪い顔で出迎えた。

ガブリエルの後ろには

「ワザワザ後輩まで連れ出しちゃって。そんなに私が怖いのか？」

ザドキエルがいた。

ルシファーはザドキエルをニヤニヤと見ている。

それに対してハア、とため息を吐く。

「状況がわかってるんですか？明らかに貴方が不利だと思えますが」

彼女の周りにも軍隊と言う取り巻きがいた。

「お前ら如きが私を捕まえることが出来ると思ってたのか？」

余裕をまだ浮かべている彼女に今度はガブリエルは叫んだ。

「お願いです!! 真実を教えてください!! 力になりたいんです!!」

必死な叫びは

「嫌だね」

ルシファーには届かない。

そんな態度にザドキエルは剣を取り出し

「……先輩、叫んでも届きませんよ

ルシファー様には」

後ろからガブリエルの体を固定して首に当てがった。

「……………え?」

何が起きたのかわからなかった。先輩が自分に剣を突き立てている。

ガブリエルの周りも動揺したがザドキエルの軍隊に取り囲まれた。

「ククツ。本当にあのザドキエルを丸め込んでるとは! サンちゃん、メタちゃん、怖い
な」

ルシファーは笑いが止まらなかった。

「全く、あの二人も貴方もめっちゃくちゃですね。ガブリエルに貴方を悪く言うのに一苦労しましたよ。あの妹にこの姉あり、とはまさにこの事ですね」

クスッとザドキエルも小さく笑う。

「何をっ!!」

ガブリエルは更に動揺した。あのフードの女性のほかにも妹が出来てるなんて思っ
てなかっただろう。

「それより、早く戻ってくださいルシファア様。あの二人が暴走しないうちに」

「どんな悪業を吹き込んだか知らないが、その前に」

ザドキエルが天界へ戻るよう促すが

「ルシファア!!!」

「どうやら悪友(バカ)が突っ込んできたみたいだ」

炎で纏った機械で大きくなっている拳がルシファアに飛んできた。

同じように木刀で受け止めた。

「ガブくんは何してるんだ君は!!」

飛んできた悪友……ミカエルはルシファアに怒鳴るように叫んだ。

「何って……これからお前らにお寝んねしてもらおうんだよ」

ルシファアはただひたすらに笑った。

第八話く不器用な離別く

ミカエルとルシファーは衝突した後、距離をとる。

「つミカさん……」

ミカエルはガブリエルの声に反応し周囲を見渡す。

ザドキエルの軍隊に囲まれたガブリエルの軍隊。

中央にはそのザドキエルに拘束されている彼女の姿がある。ミカエルは自分なりに把握した。

「君は…後輩まで巻き込んでいるのかっ!!」

「巻き込む? 違いますよ。私達はルシファー様が正しいと判断し、それに従っているんです。脅されて仕方なく、とかではない。これが私達の意志です」

聞き捨てならず、ザドキエルはミカエルの言葉を否定し、自分達で決めて動いていると言った。

「まあ、サンダルフォンとメタトロンのおかげだな。流石妹達だ」

ウンウンと頷くルシファーにガブリエルはまさかと感づく。

「妹達って……!」

「そつ。私とウリエルの後輩の双子天使ちゃん」

ルシファアは楽しそうに答えた。ガブリエル達が会ったのはそのどっちかなのだ。

「なあ。ガブちゃ……いや、ガブリエル。それにミカエル。全て害悪となる者はぶつ潰さないと世界つてのは何も変わらないんだ。一つ壊した所でまた増えてくる。それじゃあ、なんの意味もなさない」

ルシファアは笑みを消して無表情になる。

ガブリエルはもういつものように呼んでくれない彼女に悲しみを覚えるが、それどころではない。

「やっぱり何か知ってるんですね?」

「ルシ君!教えてくれ!!」

ミカエルも叫ぶ。ルシファアは何か知って動いているのは確かだった。

「それを分からないお前達には黙って眠ってもらわないと仕事が進まないんだ」

だが、彼女は紫電を周りに撒き散らしガブリエル達の軍隊を攻撃し、地面に叩きのめした。

「殺してないから安心しろ」

なんの感情もこもってない声にガブリエルは

「ルシファアああああああ!!貴方と言う人はああああああ!!!」

いろんな感情を持ちながらザドキエルを振り払い突っ込んでいく。

「ガブくん!!」

ナイフと木刀がぶつかる。

「どうして……どうして私に何も言ってくれないんですか!!」

悲痛な顔で目には涙を溜めている。

「ガブリエル……お前はもう私から離れる。その方がお前の為だ。妹でもなんでもない」

そう言うルシファアはやはり無表情で、もう知っている彼女はいないのだと確信した。

それでも

「嫌です……そんな事を言えば私が離れると思ったんですか!?私を舐めないでください!! 真実が知りたいんです!!」

離れたくなかった。妹として、仲間として彼女の隣に立ちたい。

依存気味になっている自覚はある。

ただどここんな形で離れたくなんかない。

「……………ごめん、ガブちゃん」

それを汲み取ったのか、小さくそういうと

「……………え？」

ナイフを弾き、腹に拳で殴りつけた。目が霞み、体が崩れ落ちる。だけど必死に伝えようと声を出す。

「かはっ…………ルシ……………さん、行かない……………で」

意識が無くなるまで必死に捕まえようとしたがそれは叶わなかった。

「ガブくん!!お前ええええええええええ!!」

それを見たミカエルは怒りに任せで殴り掛かろうとするが

「遅い」

目の前に現れたルシファーに全力で顔面を殴りつけられ吹き飛ぶ。

「ぐうっ…………」

倒れ伏すミカエルに近づき

「私は『今の私』を理解してくる奴らを信用してんだ。今のお前達はそこまでじゃない」

そう斬り捨てた。

意識が遠のく中、

「…………ルシファー様。もつといい方法があつたのでは？」

「あいつらには…………何があつても生きててもらいたいんだよ。私がいなくなろうとも、

生きてさえ居れば…それでいい。私はこんなやり方しか出来ないからな。キング・グロッチ、コイツら頼む」

「…：…わかったっチ」

そんな声が聞こえていた。

ルシファアはミカエルから離れている為、気づいていない。

待て、待ってくれ。君は…：

声が出そうとも出てこない。

視界がなくなっていく。

「」

「了解」

ルシファアが放った言葉にザドキエルが頷く。

ああ…：…そうか。そう言う事だったのか。

ミカエルはようやく彼女の目的を理解したと同時に目を閉じた。